

# “農と食” 北の大地から

連載第4回

## ヤギ飼育の可能性と その取り組みを追う

かつて農村地帯ならどこでも飼われていたヤギの姿を見かけなくなつて久しい。そんななかで近年、ヤギの飼育を試みたり、乳製品づくりなどに乗りだす人たちが現れている。十勝管内清水町で開かれた「全国山羊サミット」の様子を交えながら、さまざまな実践に取り組む人たちを紹介し、21世紀の人間とヤギとの関わりを考える。

### 小学生のヤギ飼育 体験が共感を呼ぶ

八月三十一日、九月一日の二日間、北海道から沖縄まで約二百人が参加して、十勝管内清水町で開かれた「全国山羊サミット」。事例紹介や見学会、ヤギの競り市：など多彩なプログラムが用意されたが、なかでも、新潟県内の小学校でヤギの体験学習をすすめる、「学校山羊ネットワーク」の実践が参加者たちの共感を呼んだ。

新潟県営妙法育成牧場長の今井明夫さんが代表世話人をつとめる「山羊ネット」は、地元農家や獣医師らと連携して小学校に子ヤギを提供する。子どもたちはヤギを迎え入れる「入学式」からエサやり、「結婚式(ヤギの文尾)」の見学、ヨーグルトづくりなどの体験学習を続けている。十五年ほど前から始まったこの試み、いまでは十五校うち新潟県内は十三校でヤギを飼育するまでになった、という。

「一般家庭の食費に占める家畜(の肉や乳製品)の割合は二〇〜四〇%を占め



# 本道酪農の救世主となるか 全国に広がるヤギ飼育の輪

「全国山羊サミット」の開催地、清水町。写真左下は、サミット会場での様子。写真右上は、清水町で飼育されているヤギの群れ。



で声をかけてみた。清水町内で農作業請負会社「アグリワーク」を経営する三谷博幸さん(1958年生まれ)。農家出身で牧草地もあり、すでに二十五頭ほどヤギを飼っている、とか。小学生の子どもが三人いる。

「この仕事を始めた十年ほど前から飼うようになったんですが、責任を持ってヤギの世話をしなければならぬ、動物とふれあうことで子どもたちにとってもプラスになっていますよ。決められた勉強しかやらない学校以上のものがあるんじゃないかな。サミットで新潟の取りくみを聞いて、「北海道でも必要だな」と思いましたね」と、三谷さんもまた教育現場での飼育に期待を寄せていた。

### 静かな山羊ブーム で頭数増の兆しも

わたしの少年時代(60年代)には、農村地帯ではヤギの姿をよく見かけた。が、農業の規模拡大が進むにつれて牛にとって代わり、いまではヤギを目にする機会はめったにない。

ちなみに道内では、一九五七年には

ていますが、消費者は家畜のことを知らなすぎ。 (ヤギの提供を通じて) わたしは「生命をいただいている」ことを教えている。学校でヤギを繁殖させることが最大の目的で、子どもたちの目の前で交尾させて、きちんと繁殖について伝える。それによって「生きる」と「死ぬ」を感じ取れるんです。できれば今後は、ヤギのと畜から解体、調理までも教えていきたい(サミットでの今井さんの講演)

父母との共同作業でヤギ小屋をつくる、子ヤギにミルクを飲ませる、家庭からママ殻や野菜クズを持参して与え

る、乳を搾る—これらは、子どもたちにとつて新鮮な体験になるようだ。なかには病気で死んだりするヤギもいるが、そのときは子どもたちと一緒に原因を勉強し、葬式もあげる。不明な点は電子メールでやり取りする。

飼育現場を熟知する今井さんの存在があったればこそその実践といえるが、北海道にはない貴重な試みだと思つた。

ここまで大がかりでなくとも、地域でネットワークをつくり、教育現場でヤギなど小家畜を飼う取りくみを具体的に考えられないだろうか。

競り市には、今年春に生まれた当歳ヤギを中心に六十頭あまりが出場したが、値段はせいぜい一万四台と安いので、農場に持ち帰る飼い主も多い。

熱心にヤギを買い求める人がいたの

一万九千戸あまりの農家で合計二万一千頭ほどのヤギが飼われていたが、七五年になると三百四十戸、四百六十戸へと激減。その後は、やや頭数が増えたものの、九〇年代には五百〜八百頭の間で推移してきた農水省畜産統計の数値。全国的にも同じ傾向が見られる。道農政部がまとめた二〇〇〇年二月現在の飼養状況が最新の数字で、それによると、道内一六六市町村の五十戸で合計七百七十七頭とある(ただし、行政が把握しきれない頭数もかなり存在する)。スイス原産のザーネン種を改良した乳用種の「日本サーネン種」が七割を占め、ほかに「トカラヤギ」や雑種が飼われている。

「沖繩では薬膳料理の素材にヤギ肉を用いる食習慣がありますが、道内で生産組合があるのは清水町だけ。観光の一部門や、社会福祉法人などで飼うケースもあるようです。定年帰農の人たちがグループでヤギ飼育に取りくむのが良い方法かもしれません」

道農産畜産課中小家畜係長の天野徹さんがこう話すように、本州府県や沖繩などに比べるとヤギの存在感薄い。が、全国的にはここ数年、静かなヤ



「生体価格の補てん策を」と訴える生産組合長の竹中懸さん

ギブムが広がっている。今回のサミットで講演した、独立行政法人家畜改良センター長野牧場の藤田優さんによると、村おこしとしてヤギを飼うところが現れ、乳や肉を加工する試みも増えてきた、という。日曜夜の「鉄腕DASH村(日本テレビ系列)」に登場するヤギ君の影響もあるようだ。

「関西の菓子メーカーが来庁しヤギ乳のプリンを製造販売したい」との話があるし、長野では地元正統派メーカーにハム製造を打診している。飼育農家などが連携して、一定量の生乳や肉を確保したうえで、メーカーなどに働きかけるといい。ヤギは飼いやすいし、

## チーズ製造も着手 肉の利用が課題に

九月下旬のある日、わたしは道内でもっともヤギの飼育頭数が多い清水町を再訪していた。

羽帯地区の日高山脈と十勝平野の境に位置するところに、(有)ランラン・ファーム(林光繁社長が管理、運営す

自然にやさしく、中山間地に適した動物であり、生産者・研究者・メーカーが連携して産業としての息吹をつくりだしたい(藤田さん)

前出の学校での体験学習のほかに、乳や肉の利用、道路脇や遊休農地などの下草刈り、アニマルセラピー、さらに身近なペット…などと、ヤギの可能性は幅が広い。粗食にも耐えるし、繁殖しやすく、子どもや高齢者でも扱える。牛のような糞尿問題を起こさず、環境に対する負荷も少ない——二世紀の地球を救うのは、大型家畜ではなく、この動物なのだろう。世の中が殺伐とし、自然環境が悪化するにしたがい、身近な家畜のヤギに対する人々の関心が少しずつ高まっている。

ヤギ部門の中心スタッフ、鶴我佐知さん(1974年生まれ)に、これまでの経緯や苦労話を聞いた。

同ファームが農業部門に着手したのは六年前のことで、「家畜を飼おう」と相談していたところ、清水町から薦められたのがヤギ。小型で飼いやすく、地元を生産組合がある——との理由からだった。九八年、長野県内や地元から二十四頭の子ヤギを購入し、事務所そばの馬小屋で飼い始めた。

が、スタッフ全員が農業の未経験者で、エサのやり方もよく分からない。ヤギを飼っている農家に通いつめて、多くのことを教えてもらった。

「突然、ヤギが病気で死んでしまったら、そのあたりの雑草を与えていたら妊娠中はガリガリに痩せてしまったりしました。十頭ほどのヤギが野犬に襲われたこともありです(鶴我さん)」

と、試行錯誤の日々が続いた。

一棟あるヤギ舎は手作りで、飼育のほうは軌道に乗った。午前八時に出動し、搾乳を済ませてエサを与え、パドックで運動させる。今後は、九月に開店した併設のレストランとの間のスペースで放牧する計画もある。

オスの子ヤギは肉用として沖繩に出荷し、メスの親ヤギから搾った乳は町内の乳業会社に委託してソフトクリームやヨーグルトに加工してきた。十月

からは、スタッフの坂本勲さん(元乳業メーカー技術者)が中心になって、チーズづくりも始める。頭数を倍増させて、来年は六十頭ほどのヤギから搾った乳をチーズに加工し、製品はレストランや直売所、ホテル関係などで販売していく計画である。

「乳量が少ない手間がかかりますが、庶民的なイメージのあるヤギだからこそ、おいしいチーズをつくり、みんなに食べてもらいたい。彼女たちの可能性に賭けるしかありませんね」と笑顔で話す鶴我さんにとって、目下の課題は「多くの人に肉をどう消費してもらえるか」だという。

「オスのヤギの処理が沖繩に集中していることが、肉の値段の安さの一因になっています。ヤギ肉を使った料理をレストランで提供したりして、一日も早く普及させたい(鶴我さん)」

と言った表情を引き締めた。ヤギの乳製品づくりの先頭を走る同ファームの今後の展開が楽しみです。

清水町内の飼育頭数は〇一年

ランラン・ファームで5年間、ヤギを飼ってきた鶴我佐知さん。工房ではヤギ乳チーズの製造も始まった

度には六百二十頭に達しており、道内では断トツだ。これは、八七年に設立された清水町特用家畜生産利用組合の地道な取り組みによるところが大きい。生産組合長をつとめる、御影地区の竹中懸さん(1933年生まれ)は合計百七十頭ほどのヤギを飼っている。開拓(代目)で、自分の子どもをヤギの乳で育てた経験もある。牛飼いやったが、いまでは「二世紀の畜産はヤギしかない」と確信している。

組合の発足当時は、十勝農協連が首頭を取ってヤギの普及を図ろうとしたが、生体価格が安いうえに寄生虫の発生などで思うにまかせず、十年前からは清水町単独の組織になった。現在の組合員数は十三戸。酪農をリタイアした年配者が多い。

「組合ができて二三年後、細々と残っていたんだが、長野で会議があったときに九州の業者と知り合い、「生体でキロ七百円なら買い取るよ」と言われて、それなら採算ベースに乗るな、と思いを入れた。しばらくは沖繩向けで順調に売れてきた(竹中さん)」

が、最近生体価格が低迷し、口蹄疫や狂牛病の影響も受けていることから、

## 退職後の人生の夢 をヤギ飼育に託す

果樹園が広がる後志管内(木町)で定年帰農の道を選んだ中園穂さん(1937年生まれ)は、これからの人生をヤギに託してみようと考えている。



「ヤギを通じて自然環境を元に戻したい」と話す仁木町の中園裕さん

九州出身の中園さんは酪農学園大学の一期生。卒業後は雑誌記者をへて、山梨県内の農村研修施設や道内の農業高校などで三十年間ほどの教員生活を送った。最後の赴任校(81〜97年)になった余市高では園芸を担当したが、「学校の農場だけでは実力がつかない」と考え、奥さんが新規就農する形をとって五ヘクタールほどの土地を取得し、八五年に現在地へ移り住んだ。

もともと動物好きで農業畑が長い。購入した土地にリンゴやサクランボを植え、牛を一頭飼って乳を搾り、池を掘ってアイガモを放すなど、現役時代も実践に努めた。ヤギは、十年前に二頭購入したのを皮切りに、最近も後輩がやっている赤井川村の観光農場から一頭を導入。さらに「山羊サミット」でも二頭買ってきた。いまではオスが二頭、メスが三頭——これを二十〜三十頭まで増やして自家用のチーズをつくるのが目標、と笑顔をみせる。

「近所の三歳くらいの子がヤギに触って喜んだり、赤ん坊を連れた父母が見学にきたりますよ。ここを情操教育の場として地域の子どもたちに開放し、ヤギと親しんでほしい。新潟のネットワークのように、学校へ出張してヤギを飼ってもらい、休みのときにはわが家に引き取ってもいいしね」

と夢を広げる。四国では、農協などが「山羊バンク」をつくり、遊休地を抱える農家などにヤギを貸し出している、とか。そんな話を紹介しながら、

「ヤギの飼育は自然環境を元に戻そうとする隠れた運動ですよ。農業をばらまく農業ではダメだし、ヤギや鶏を飼うようにならないと農村は豊かになれません。北海道ではヤギに対する関心が薄らいでいるし、(農業系の)大学にも応援態勢がない。でも、単なる経済動物としてではなく、情操教育とかゆとりのある生活、自然環境の保護や農薬の問題などをヤギから発信していけ



「サミット」の一環でヤギ肉の直売も——肉の普及は今後の大きな課題だ

るんじゃないでしょうか」

と、中園さんが力を込めた。生産拡大や効率一辺倒の畜産を、生命の大切さを感じ取れるものに転換していくには、人生経験に富んだ定年帰農者の役割は大きいようだ。

## 21世紀の救世主か 広がる飼育の試み

「全国山羊ネットワーク」代表の長野實さん(日大生物資源科学部教授)によると、世界のヤギの飼育頭数はアジア・アフリカ地域で増加が著しく、アメリカでも八〇年代から年率一%で増えており、同国のヤギ乳生産量は年間六〇

万吨にも上る。ヤギ乳チーズなどの消費がアメリカで盛んになり、ヨーロッパからのヤギ乳製品の輸入も増大。「ヤギは二世紀の救世主」と力説する長野さんは、その理由として、

- ①牛など穀物消費型の家畜飼養はかなり制限されるなかで、ヤギは未利用資源を有効利用する力が大きい
- ②健全農業の復活に有効性がある
- ③国際協力への理解に役立つ
- ④ヤギを伴侶とする生活は人々に富や嗜好の満足、癒しをもたらす

の四つを挙げている(畜産の研究99年2月号)。たかがヤギ、されどヤギ——この小動物の存在は、なかなか奥が深いものがある。

道内では、前出の取りくみのほかに、飲用牛乳を製造してきた中標津町内の牧場がヤギ乳の製品化を模索したり、新規就農者がヤギを飼う試みなどが始まっている。北の大地のあちこちでヤギの姿が見られる時代は、そう遠くないのかもしれない。

※ヤギに関する情報は、(社)日本山羊協会のホームページを参照するとよい。  
<http://group.lin.go.jp/mensanyo/index.htm>